

昭和56年度 日本体育協会スポーツ科学研究報告

No. XI スポーツマン及びスポーツ科学指導者を対象とする
スポーツ障害・スポーツ外傷の発生状況等に関する
アンケート調査

財団法人 日本体育協会

スポーツ科学委員会

昭和56年度 日本体育協会スポーツ科学研究報告

No. XI スポーツマン及びスポーツ科学指導者を対象とする スポーツ障害・スポーツ外傷の発生状況等に関する アンケート調査

報告者 (財)日本体育協会
スポーツ診療所

高 沢 晴 夫 土 屋 和 平 川 野 哲 英

スポーツ科学研究所

黒 田 善 雄 塚 越 克 己

1. 本調査の目的

スポーツを振興するためには、スポーツマンの傷害・疾病を予防することが重要であるが、ひとたび傷害・疾病にかかった場合には一日も早く回復させ、現場に復帰させることが望ましい。

^{1), 2), 3), 4), 5)}
しかし、これまでの調査や諸外国の情報などから、日本におけるスポーツ医学の現場への応用や、スポーツ医学面の臨床体制は、かなり遅れているように思われた。

そこで、我が国のスポーツ指導者、スポーツマン

に対し、傷害・疾病の発生状況、医療機関等の利用状況、疾病予防等についての客観的なデータを得て、更に将来のスポーツ医学、特に臨床面のあり方等についての希望をアンケート調査の形で実施した。

この調査が広くスポーツ関係者等のご理解を得て、我が国のスポーツ医療体制、研究の充実促進等の基礎資料になり、国際競技力の向上ならびに国民スポーツ振興の一助となることを望むものである。

-
- 1) 大学スポーツの現状と振興策について、(財)日本体育協会、昭和55年。
 - 2) 第1回加盟団体関係臨床医相互研修会議事録、(財)日本体育協会、昭和52年。
 - 3) ソ連、東独及び西独のスポーツ科学調査報告、(財)日本体育協会、1979。
 - 4) 西ドイツ・スポーツ医・科学調査報告、(財)日本体育協会、1980。
 - 5) 体協・スポーツ診療所の歩みと今後、月刊トレーニング・ジャーナル、4、1982。

2. 調査方法

1) 調査用紙

本研究に使用したアンケート用紙を表1及び表2-a, 2-bに示した。表1のアンケート用紙は、スポーツマン(スポーツを行なうひとの意)を対象とした調査に使用され、表2-a, 2-bはスポーツ指導者を対象とした調査に使用されたアンケート用紙である。

本研究におけるアンケートの配布と回収の方法は、郵送による方法と使送(直接手渡す)による方法との併用であったが、いずれの場合も、表3-a, 3-bに示す調査への協力を依頼文とアンケート回収への協力要請文を添えて行なわれた。

2) 調査実施期日

本調査のアンケート用紙は、昭和57年1月11日から同年2月20日の間に、各調査対象への配布と回収が行なわれた。

表1. スポーツマン用アンケート用紙

アンケート (スポーツマン用)		
1. あなたが主に行なっている競技(スポーツ)名および競技歴をご記入下さい。 (例: 陸上競技)		
_____	_____	_____年
2. あなたはこの一年間に、スポーツ活動によって病気にかったり、外傷を受けたことがありますか? 次の□内に○印でお示下さい。		
ア <input type="checkbox"/> はい		
イ <input type="checkbox"/> いいえ		
3. 上記質問でアと回答した方は、医師等から治療を受けたかどうか、□内に○印でお示下さい。		
ア <input type="checkbox"/> 医師等から治療を受けたことがある。		
イ <input type="checkbox"/> 受けたことはない。		
4. 上記質問でアと回答した方は、次のどのような医療機関等において、通院・入院した日数をご記入下さい。(不明の場合は、およその日数をご記入下さい。) 医療機関等が複数の場合には、それぞれに一年間の合計をご記入下さい。		
ア 整形外科・外科	通院 <input type="checkbox"/> 日	入院 <input type="checkbox"/> 日
イ 内科	通院 <input type="checkbox"/> 日	入院 <input type="checkbox"/> 日
ウ 接骨院	通院 <input type="checkbox"/> 日	入院 <input type="checkbox"/> 日
エ はり・灸、マッサージ	通院 <input type="checkbox"/> 日	入院 <input type="checkbox"/> 日
オ その他(記入)	通院 <input type="checkbox"/> 日	入院 <input type="checkbox"/> 日
5. あなたはこの一年間に健康診断を受けましたか?		
ア <input type="checkbox"/> はい		
イ <input type="checkbox"/> いいえ		
6. あなたはスポーツ医学を専門とする病院が必要だと思いますか?		
ア <input type="checkbox"/> 絶対必要		
イ <input type="checkbox"/> 必要		
ウ <input type="checkbox"/> あった方がよい		
エ <input type="checkbox"/> どちらともいえない		
オ <input type="checkbox"/> 必要ない		
7. スポーツ医学を専門とする病院が必要である理由、その他ご意見・ご希望をご記入下さい。		
.....		
.....		
.....		
.....		
.....		
ご協力ありがとうございました。		

表2-a. スポーツ指導者用アンケート用紙(表面)

アンケート (指導者用)	
1. あなたが指導している競技部(クラブ)が行っている競技(スポーツ)名および所属する都道府県名をご記入下さい。(例: 陸上競技・東京) また、主に指導対象としている下記種別を□内に○印でお示下さい。	
_____ 競技 _____ 都道府県	
指導対象の種別	ア <input type="checkbox"/> 大学生
	イ <input type="checkbox"/> 高校生
	ウ <input type="checkbox"/> 中学生
	エ <input type="checkbox"/> 小学生
	オ <input type="checkbox"/> 実業団
	カ <input type="checkbox"/> 社団法人
	キ <input type="checkbox"/> ナショナルチーム
	ク <input type="checkbox"/> その他の選抜チーム
	ケ <input type="checkbox"/> その他
2. あなたが指導している競技部(クラブ)に所属している現在の部員(クラブ員)の男女別人数をご記入下さい。	
男子 _____ 人、 女子 _____ 人 計 _____ 人	
3. この一年間に、スポーツ活動による病気、外傷等で、医師等から治療を受けたことのある部員(クラブ員)は、全体の中で何割位ですか? 次のア-カの該当する□の中に○印でお示下さい。	
ア <input type="checkbox"/> 10%以下	
イ <input type="checkbox"/> 11-20%	
ウ <input type="checkbox"/> 21-30%	
エ <input type="checkbox"/> 31-40%	
オ <input type="checkbox"/> 41-50%	
カ <input type="checkbox"/> 51%以上	
4. あなたが指導する競技部(クラブ)は、部員(クラブ員)の健康管理や医療のために、特定の病院等をもって(指定して)おりますか?	
ア <input type="checkbox"/> はい	
イ <input type="checkbox"/> いいえ	
5. 特定の病院等をもって(指定している)場合、その病院等を決めた理由は次のどれですか?(質問4でアの場合)	
ア <input type="checkbox"/> 近くて、便利だから。	
イ <input type="checkbox"/> スポーツ医学に理解をもつ医師がいるから。	
ウ <input type="checkbox"/> その他(理由を記入下さい) _____)	

表2-b. スポーツ指導者用アンケート用紙(裏面)

(表面より)	
6. 特定の病院等をもって(指定している)場合、次のどれですか? (質問4でアの場合)	
ア <input type="checkbox"/> 病院	
イ <input type="checkbox"/> 医院、診療所	
ウ <input type="checkbox"/> 接骨院	
エ <input type="checkbox"/> はり・灸、マッサージ院	
オ <input type="checkbox"/> その他(記入) _____)	
7. あなたが指導する競技部(クラブ)では、部員(クラブ員)に定期健康診断を行っておりますか?	
ア <input type="checkbox"/> 年1回以上行なっている。	
イ <input type="checkbox"/> 行っていない。	
8. あなたはスポーツ医学を専門とする病院が必要だと思いますか?	
ア <input type="checkbox"/> 絶対必要	
イ <input type="checkbox"/> 必要	
ウ <input type="checkbox"/> あった方がよい	
エ <input type="checkbox"/> どちらともいえない	
オ <input type="checkbox"/> 必要ない	
9. スポーツ医学を専門とする病院が必要である理由、その他ご意見・ご希望をご記入下さい。	
.....	
.....	
.....	
.....	
.....	
ご協力ありがとうございました。	

表3-a アンケート調査協力依頼文

昭和57年1月 日

指導者・スポーツマン各位

財団法人 日本体育協会

スポーツ振興のためのアンケート調査への協力について(依頼)

本会ではスポーツ振興のために、別紙アンケート調査用紙のとおり主にスポーツ医学についてのアンケート調査を実施することになりました。

つきましては、ご多忙中恐縮ですが、ご協力くださいますようお願いいたします。

調査の結果につきましては、あくまで統計的に処理し、個人名では公表せず、ご迷惑のかからないようにいたしますことを念のため付記します。

なお、調査の方法は直接手渡しと郵送とによって行ないますが郵送の場合は同封の返信用封筒をご利用され、来る2月20日(土)までに必着するようご投函ください。

このアンケート調査へのご協力を予め感謝申し上げ、貴殿のご活躍をお祈りいたします。

3) 調査対象とアンケートの回収率

本調査は、スポーツを行なう人(スポーツマン)とスポーツの指導者の両面を対象として行なわれた。

スポーツマンについては、表4-aに示すように、トップ・アスリートとスポーツ愛好者とに大きく2区分にすることができる対象であった。

トップ・アスリートについては、文字通り現在わが国で最高水準の競技成績を示すものか、またはこれに準ずる成績を示す者で、本調査対象の一部となった競技力向上コーチ等の手を通じ、表4-aに示す通り、陸上競技よりアイスホッケーにいたる17競技種目の選手810名にアンケートを配布し、この67.5%である547名よりアンケートを回収した。

スポーツ愛好者とは、地域社会に成立しているスポ

表3-b アンケート調査回収への協力要請について

昭和57年1月 日

競技部(クラブ)指導者各位

財団法人 日本体育協会

アンケート調査回収への協力要請について

本会では、スポーツ振興の方策を検討する一助として、同封の「アンケート調査用紙」により、指導者、スポーツマンに対しアンケート調査を実施することになりました。

つきましては、同封のアンケート調査用紙(スポーツマン用)を、貴殿が指導しておられる競技部(クラブ)に所属する競技者(クラブ員)10人に配布していただき、また記入後回収され、同封の返信用封筒により一括ご返送くださいますようお願い申し上げます。

部員(クラブ員)が10人未満の場合には、現有の部員のみで結構です。回収の締切日につきましては、来る2月20日(土)に当方へ必着とさせていただきます、ご多忙中恐縮ですがご手配くださいますようお願いいたします。

ーツクラブでスポーツを行なっている人達で、本人の趣味や体力づくり等の目的で日常生活にスポーツ活動を取り入れている人達である。この対象については、これらのクラブの指導者の協力を得て、表4-aに示す通り、体操クラブなど8種目のクラブに所属するスポーツ愛好者400名にアンケートを配布し、その66.0%である264名のアンケートを回収した。従って、トップ・アスリートとスポーツ愛好者とならなる本調査対象のスポーツマン全体としては、1210名にアンケートを配布し、その66.0%である811名よりアンケートを回収したことになった。

もう一方の調査対象であるスポーツ指導者については、表4-bに示す通り、競技力向上コーチ、スポーツ指導員、スポーツ少年団指導員、スポーツクラブ指導者、プロスポーツ指導者の5区分にするこ

とができる対象であった。

競技力向上コーチとは、財)日本体育協会(以下、日体協)が、わが国のトップ・アスリートのレベル・アップをねらって設置している指導者である。この調査対象については、279名にアンケートを配布し、59.1%の165名より結果を回収した。

スポーツ指導員とスポーツ少年団指導者は、日体協が公認しているスポーツ指導者としての資格を有している人達で、スポーツ指導員については、昭和56年12月末現在、日体協に登録されている20,740名

表4-a 調査対象(スポーツマン)とアンケート配布数ならびに回収数

スポーツマンの区分	アンケート配布数(%)	アンケート回収数(%)
①、トップ・アスリート		
1) 陸上競技	90 (9.1)	57 (10.4)
2) 水泳	30 (3.0)	7 (1.3)
3) バスケットボール	60 (6.1)	60 (11.0)
4) 体操	50 (5.1)	30 (5.5)
5) バレーボール	60 (6.1)	49 (9.0)
6) テニス	40 (4.0)	27 (4.9)
7) 軟式野球	30 (3.0)	20 (3.7)
8) 剣道	50 (5.1)	15 (2.7)
9) サッカー	50 (5.1)	36 (6.6)
10) アメリカンフットボール	60 (6.1)	50 (9.1)
11) バドミントン	50 (5.1)	20 (3.7)
12) 柔道	50 (5.1)	48 (8.8)
13) レスリング	20 (2.0)	20 (3.7)
14) ラグビー	50 (5.1)	41 (7.5)
15) スキー	40 (4.0)	10 (1.8)
16) スケート	50 (5.1)	34 (6.2)
17) アイスホッケー	30 (3.0)	21 (3.8)
18) その他		2 (0.4)
小計	810(100%) (66.9%)	547 (67.5%) (67.4%)
②、スポーツ愛好者		
1) 体操	50 (12.5)	18 (6.8)
2) バレーボール	50 (12.5)	47 (17.8)
3) 水泳	30 (7.5)	18 (6.8)
4) 剣道	40 (10.0)	43 (16.3)
5) 柔道	50 (12.5)	10 (3.8)
6) ジョッキング	50 (12.5)	16 (6.1)
7) サッカー	40 (10.0)	20 (7.6)
8) 軟式野球	40 (10.0)	49 (18.6)
小計	400 (100%) (33.1%)	264 (66.0%) (32.6%)
合計	1210(100%) (100%)	811(66.0%) (100%)

表4-b 調査対象(スポーツ指導者)とアンケート配布数ならびに回収数

スポーツ指導者の区分	アンケート配布数	アンケート回収数
①、競技力向上コーチ		
1) 主任強化コーチ	14	} 87
2) 強化コーチ	115	
3) ジュニア強化コーチ	150	
小計	279(100%) (35.4%)	165(59.1%) (42.6%)
②、スポーツ指導員		
1) 茨城県在住者	15	3
2) 栃木県 "	15	6
3) 群馬県 "	15	0
4) 埼玉県 "	30	14
5) 千葉県 "	30	5
6) 東京都 "	60	29
7) 神奈川県 "	30	14
8) 不明		4
小計	195(100%) (24.7%)	77(39.5%) (19.9%)
③、スポーツ少年団指導者		
1) 茨城県在住者	15	7
2) 栃木県 "	15	6
3) 群馬県 "	15	4
4) 埼玉県 "	30	16
5) 千葉県 "	30	11
6) 東京都 "	60	21
7) 神奈川県 "	30	18
小計	195(100%) (24.7%)	83(42.6%) (24.4%)
④、スポーツクラブ指導者		
1) 体操クラブの指導者	21	
2) バレーボール	20	
3) 水泳	3	
4) テニス	10	
5) ジョッキング	10	
6) 柔道	10	
7) 剣道	5	
8) サッカー	4	
9) 軟式野球	5	
小計	90(100%) (11.4%)	58(64.4%) (15.0%)
⑤、プロスポーツ指導者		
1) 野球	12	
2) 相撲	15	
3) その他	3	
小計	30(100%) (3.8%)	4(13.3%) (1.1%)
合計	789(100%) (100%)	387(49.0%) (100%)

の中から、関東地方に在住している195名を無作為抽出して調査対象とし、その39.5%に当たる77名よりアンケートを回収した。スポーツ少年団指導者についても、昭和56年12月現在、日体協に登録されている77,384名の中から、関東地方に在住している195名を無作為抽出してアンケートを郵送し、その42.6%である83名より結果を回収した。

表4-b中の4、スポーツクラブ指導者は、上記1、2、3の指導者がいずれも日体協に登録されている組織内の指導者であるのに対して、個人的な情報によって得た地域社会に成立しているスポーツクラブの指導者で、いわば日体協組織外の指導者である。この調査対象については、90名にアンケートを配布し、その64.4%である58名より結果を回収した。

プロ・スポーツ指導者については、野球と相撲、その他の指導者30名にアンケートを配布し、その13.3%である4名より結果を回収した。

スポーツ指導員全体としては、789名にアンケートを配布し、その49%に当たる387名より結果を回収したことになる。

3. スポーツマンについての調査結果と考察

1) 標本構成について

スポーツマンを対象として得たアンケート結果は、表4-aに示す通り、全体として811名分(100%)で、そのうちトップ・アスリートが547名(67.4%)、スポーツ愛好者が264名(32.6%)である。従って、スポーツマン全体としての回答結果には、トップ・アスリートの回答傾向が強く反影される可能性があると考えられる。ただし、トップ・アスリートとスポーツ愛好者との比較については、両者とも比較に耐える標本数が得られていると考えられた。

トップ・アスリートの547名を競技種目別に見ると、表4-aに示す通り陸上競技等18種目があるが、最も多いバスケットボールでも11%(60名)であり、調査結果を競技種目別に検討するには標本数に不足している。ただし、トップ・アスリート全体としては、ある特定種目にかたよらない結果が得られるであろうと考えられた。

スポーツ愛好者の種目別標本構成数を見ると、表4-aに示す通りバレーボール、剣道、軟式野球の3種目が多く、3種目で全体の50%を超えるので、スポーツ愛好者全体としての結果には、この3種目の特性が強く反影される可能性が考えられた。また、トップ・アスリートについてと同様、スポーツ愛好者についても種目別に調査結果を検討するには標本数に不足していると考えられた。

図1に標本構成に関する一資料として、調査対象の競技歴度数分布を示した。この競技歴は、表1に示すアンケートの質問項目1の回答結果から得たものであるが、トップ・アスリートにおいては、6年以上11年未満と回答した者(43.0%)が多く、平均7.68年、SD4.08であった。一方、スポーツ愛好者の方は、6年未満と回答した者(35.6%)が多かったが、平均値は9.38年、SD6.63と若干トップ・アスリートより高かったが、両者に有意差は見られなかった。

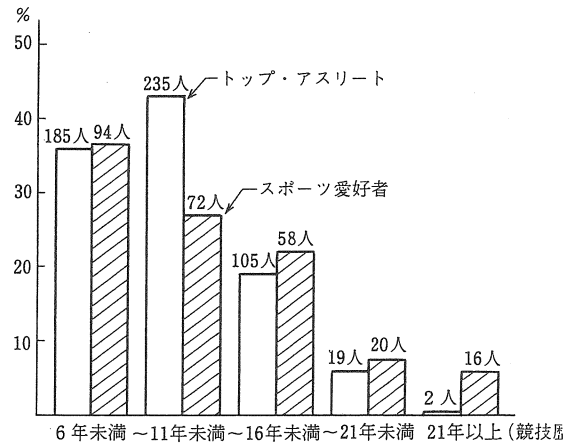


図1 トップ・アスリート及びスポーツ愛好者の競技歴

2) あなたはこの一年間に、スポーツ活動によって病気にかかったり、外傷を受けたことがありますか?……の回答結果

表1に示すアンケート用紙・質問2の回答状況についてである。同アンケート用紙に示す通り、回答は“はい”=かかった、“いいえ”=かからない、の2通りで得ているが、結果は図2に示すように、スポーツマン全体としては、62.6%が“はい”と回答し、37.4%が“いいえ”と回答した。これをトップ・ア

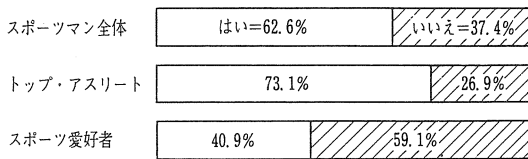


図2 この1年にスポーツ活動により病気、外傷を受けたことがある(はい)か否か(いいえ)の回答状況

スリートとスポーツ愛好者に分けて見ると、トップ・アスリートにおいては、「はい」と回答したの方がはるかに多く73.1%、これに対して、スポーツ愛好者の方は、「いいえ」と回答したの方がわずかに多く59.1%であった。もちろんこのアンケートからでは、おこした病気や外傷の内容は不明であるが、スポーツを行なう人の半数前後のひとが、スポーツ活動中に病気や外傷をおこしていると回答している状況、また、この状況がトップ・アスリートになるほど高くなる傾向については、スポーツを振興させるに当たっての安全対策、あるいはスポーツ医学の普及・振興の重要性を考えさせられる。

3) 上記の質問アと回答した方は、医師等から治療を受けたかどうか……の回答結果

表1に示すアンケート用紙・質問2において、「はい」=病気や外傷をおこした、と回答した者に対する質問で、病気や外傷した際医師等の治療を受けたか否かの回答結果についてである。

回答結果は図3に示す通り、トップ・アスリート、スポーツ愛好者いずれにしても、90%を越える者が医師等の治療を受けていると回答している。従って、図2に示すスポーツ活動中におこした病気や外傷のほとんどが、少なくとも医師等の治療を受けねばならなかった内容の病気や外傷であったと考えられる。

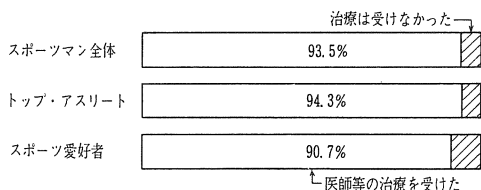


図3 スポーツ活動中に病気や外傷をおこした際、医師等の治療を受けたか否かの回答状況

4) どのような医療機関等で治療を受けたか? ……の回答状況

表1のアンケート用紙において、質問3で医師等から治療を受けたことがあると回答している者についての質問で、どのような医療機関等で治療を受けたかを、整形外科・外科、内科、骨接院、はり・灸・マッサージ、その他の5種類で回答を求めた。回答の方法は、表1に示すように、それぞれに通院何日、入院何日かを記入する方法であったが、回答の多くは□内に○印を付けただけで、日数を記入した回答は少なかったため、単に5種類の医療機関等の別に通院したか否か、入院したか否かの資料整理にとどめた。

アンケートの質問項目3において、医師等から治療を受けたと回答した者は、トップ・アスリートにおいて400名、スポーツ愛好者において108名の計508名であった。この者達が、どのような医療機関等で治療を受けたかの回答状況が表5である。すなわち、スポーツマン全体としては、整形外科・外科に通院して治療を受けたと回答した者が最も多く58.9%、ついではり・灸・マッサージの32.7%、接骨院の25.6%、内科に通院して治療を受けた者は少なく7.5%であった。トップ・アスリートとスポーツ愛好者とに分類して回答状況を比較してみると、整形外科・外科が最も多いのは両者同じで、次いで多いのが、トップ・アスリートにおいては、はり・灸・マッサージであるのに比し、スポーツ愛好者においては接骨院であった。推測すると、トップ・アスリートにおいては、骨折・捻挫等の治療を受けるに際して、より多くの者が整形外科を選択するのに比し、スポーツ愛好者においては、接骨院を選択する者も少なくないと思われる。

トップ・アスリートにおいて、はり・灸・マッサージが多いのは、トップ・アスリートの特性をよく示していると考えられる。すなわち、この治療方法から考えられる疲労回復、コンディショニングといった点である。

欧米をはじめ、スポーツ医学の先進国においては、この分野をスポーツドクターとトレーナーによって

対処しているが、この制度のないわが国においては、はり・灸・マッサージに頼らざるをえないのであろう。

表5 治療を受けた医療機関等

		トップアスリート 400人		スポーツ愛好者 108人		スポーツマン全体 508人	
通院した	整形外科・外科	246人	61.5%	53人	49.1%	299人	58.9%
	整形外科	33	8.3	5	4.6	38	7.5
	接骨院	97	24.3	33	30.6	130	25.6
	はり・灸、マッサージ	140	35.0	26	24.1	166	32.7
	その他	11	2.8	4	3.7	22	4.3
整形外科に入院した		27	6.8	3	2.8	30	5.9
内科に入院した		11	2.8	0	0	11	2.2

5) あなたはこの一年間に健康診断を受けましたか?……の回答結果

表1のアンケート、質問5についての回答状況は、図4に示す通り、スポーツマン全体としても、またトップ・アスリートとスポーツ愛好者とに分けて見ても“受けた”と回答した者が約70%であった。定期健康診断を義務付けられている企業団等の受診率も一般に70%前後であるから、これに類似した結果が得られたのであろう。スポーツマンだからといって、必ずしも高い受診状況でもなければ、低い受診状況でもないようである。ただし、多くの運動負荷と厳しいトレーニングに耐えなければならないトップ・アスリートの受診率が、スポーツ愛好者と同程度か若干低いであろうという回答状況には注目すべきであろう。

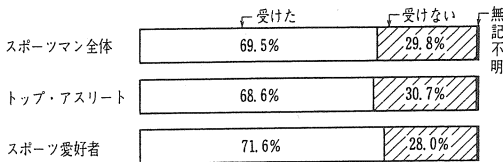


図4 この1年間に健康診断を受けましたか?の回答状況

6) あなたはスポーツ医学を専門とする病院が必要だと思いますか?……の回答結果

結果は図5に示す通り、スポーツマン全体としての回答状況は、絶対必要と回答した者44.8%、必要と回答した者22.9%で、あった方がよいと回答した者24.3%、どちらともいえない5.8%、必要ない1.4%、無記不明0.9%であった。これをトップ・アスリートとスポーツ愛好者とに分けて見ると、若干ことなる状況が観察される。すなわち、トップ・アスリートにおいては、絶対必要とその必要性を強く訴える者が50%を超えるに比し、スポーツ愛好者の回答は約30%であった。この回答結果には、質問の“スポーツ医学を専門とする”という個所についての理解度が関係していると思われる。わが国においては、いまだスポーツドクターの発足を見ておらず、また大学医学部にスポーツ医学の講座が開かれていない現状にもかかわらず、トップ・アスリートにおいては、すでにその半数以上がスポーツ医学専門病院の必要性を強く訴えている点は注目すべきであろう。すなわち、早急にわが国スポーツ界もスポーツ医学に精通するスポーツドクターを誕生させるべきであろうし、スポーツ医学を専門とする医療機関を設置すべきであろう。

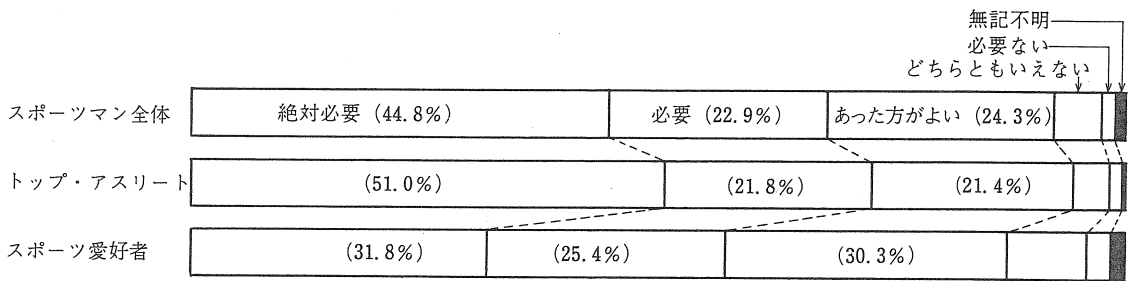


図5 スポーツ医学を専門とする病院を必要とするか?……の回答状況。

4. スポーツ指導者についての調査結果と考察

1) 標本構成について

スポーツの指導者を対象とする調査結果は、表4-bに示す通り387名について得たが、そのうち42.6% (165名)が競技向上コーチで最も多く、ついでスポーツ少年団の指導者で24.4% (83名)、スポーツ指導員が19.9% (77名)、スポーツクラブの指導者が15.0% (58名)、プロスポーツの指導者1.1% (4名)と、標本の半数近くを競技力向上コーチが占めているので、スポーツ指導者全体としての調査結果には、競技力向上コーチの特性が強く反影される可能性がある。

表4-bに示す通り、スポーツ指導者を大きく5区分にすることができるが、4名の調査結果しか得られていないプロスポーツの指導者は除外するとしても、他4区分については、標本数に大小(58~165名)はあるにしても、それぞれ比較してみることにした。

スポーツ指導者をスポーツ種目別に分類してみると、表6の通りである。競技力向上コーチについては、陸上競技より近代五種にいたる41種目に0.6~7.9%で標本数がちらばり、その結果には、スポーツ種目から見た特徴は出てこないであろう。スポーツ指導員については、陸上競技から空手にいたる12種に2.6~16.9%に標本が分布しているが、バレーボール、バドミントン、卓球の3種目を合せると45.5%になるので、この3種目の特性が強く反影される可能性はあろう。スポーツ少年団の指導者については、陸上競技から馬術にいたる15種目に1.2~27.7%に分布しているが、野球の1種だけが27.7%ととびぬけて多いので、この種目の特性が強く出る可能

性があるかもしれない。スポーツクラブの指導者については、陸上競技からアーチェリーにいたる9種目に、1.7~29.3%に分布しているが、バレーボールだけが29.3%と大きな標本数のため、この種目の特性が強く出る可能性がある。

スポーツ指導者全体を種目別に分類してみると、0.3~10.1%の分布で、特にどの種目の特性が強く出るといえる可能性はないように思える。

表2-aに示す通り、アンケートの1項目として、スポーツ指導者の指導対象を大学生からその他にいたる9分類で調査しているので、この調査結果を標本構成の一資料として示すと、表7の通りであった。スポーツの指導者5区分ごとに特徴が見られ、競技力向上コーチの指導対象は、大学とナショナルチームとの二つだけで約50%づつ、スポーツ指導員の対象は一般社会人が最も多く42.9%、スポーツ少年団指導員の対象は、中学生39.8%、小学生42.2%で、両者で80%を越えた。スポーツクラブの指導者の対象は、一般社会人が31%で最も多かった。スポーツ指導者全体としての指導対象は、大学生とナショナルチームの2種が20%台で多く、中学生、小学生、一般社会人の3種が12%前後で、他は2.1~7.0%の少数であった。

表6 スポーツ種目別指導者数

スポーツ種目	競技力向上 指導者 人	向上 率 %	スポーツ 指導 人	指導 率 %	少年 指導 人	指導 率 %	クラブ 指導 者 人	指導 率 %	プロスポーツ 指導 者 人	指導 率 %	合 計 人	合 計 %
陸上競技	10	6.1	3	3.9	3	3.6	8	13.8	2	50.0	26	6.7
水泳	2	1.2	4	5.2	3	3.6	1	1.7			10	2.6
飛込	1	0.6									1	0.3
水球	2	1.2									2	0.5
野球	2	1.2	5	6.5	23	27.7	6	10.3			36	9.3
ソフトボール			2	2.6	4	4.8					6	1.6
テニス	6	3.6	3	3.9	2	2.4	6				17	4.4
バレーボール	9	5.5	9	11.7	4	4.8	17	29.3			39	10.1
バスケットボール	9	5.5	4	5.2	4	4.8					17	4.4
バドミントン	1	0.6	13	16.9							14	3.6
卓球	5	3.0	13	16.9	2	2.4					20	5.2
サッカー	7	4.2	4	5.2	15	18.1	3	5.2			29	7.5
ラグビー					1	1.2					1	0.3
ハンドボール	6	3.6									6	1.6
ホッケー	9	5.5									9	2.3
体操	13	7.9	6	7.8	1	1.2	8	13.8			28	7.2
新体操	3	1.8									3	0.8
シンク	1	0.6									1	0.3
レスリング	7	4.2									7	1.8
ボクシング	4	2.4									4	1.0
柔道	10	6.1			5	6.0	3	5.2			18	4.7
剣道					10	12.0					10	2.6
空手			5	6.5	1	1.2					6	1.6
相撲							3	5.2			3	0.8
ウエイトリフティング	6	3.6									6	1.6
フェンシング	3	1.8									3	0.8
アーチェリー	5	3.0					1	1.7			6	1.6
ライフル	4	2.4									4	1.0
クレー	1	0.6									1	0.3
ボート	4	2.4									4	1.0
カヌー	5	3.0									5	1.3
ヨット	3	1.8									3	0.8
スキー	5	3.0									5	1.3
スケート	4	2.4									4	1.0
アイスホッケー	1	0.6									1	0.3
ボブスレー	2	1.2									2	0.5
リュージュ	2	1.2									2	0.5
バイアスロ	1	0.6									1	0.3
自転車	5	3.0									5	1.5
馬術	4	2.4			1	1.2					5	1.3
近代的五種	1	0.6									1	0.3
その他	2	1.2	6	7.8	4	4.8	2	3.4	2	50.0	14	3.6
無気不明											2	0.5
合計	165	100	77	100	83	100	58	100	4	100	387	100

表7 スポーツ指導者の指導対象別標本数

対象	競技力向上 コーチ	スポーツ 指導員	少年団 員	スポーツクラブ 指導者	プロスポーツ 指導者	合計
大 学 生	79 (47.9)	1 (1.3)	4 (4.8)	4 (6.9)		88 (22.7)
高 校 生		8 (10.4)	10 (12.0)	9 (15.5)		27 (7.0)
中 学 生		8 (10.4)	33 (39.8)	6 (10.3)		47 (12.1)
小 学 生		10 (13.0)	35 (42.2)	1 (1.7)		46 (11.9)
実 業 団				8 (13.8)		8 (2.1)
一 般 社 会 人		33 (42.9)	1 (1.2)	18 (31.0)		52 (13.4)
ナショナルチーム	86 (52.1)					86 (22.2)
その他選抜チーム						
そ の 他		13 (16.9)		11 (19.0)	3 (75.0)	27 (7.0)
無 記 不 明					1 (25.0)	6 (1.6)
合 計	165 (100)	77 (100)	83 (100)	58 (100)	4 (100)	387 (100)

2) この1年間に、スポーツ活動による病気、外傷等で、医師等から治療を受けたことのある部員(クラブ員)は、全体の中で何割位ですか?……の回答状況

回答は、表2-aに示す通り、10%以下、11~20%、21~30%、31~40%、41~50%、51%以上の6種で得た。結果は、表8に示す通りである。スポーツ指導者全体としての回答状況は、治療を受けた者10%以下と回答した者が最も多く62.7%であった。ついで11~20%が治療を受けたとする者が16.2%で、他は10%以下の少数であった。ただし、指導者区分別に見ると、競技力向上コーチに大きな特徴があり、他の指導者は、治療を受けた者10%以下と回答したのがいずれも80%を越えるのに比し、競技力向上コーチにおいては38.8%と低く、11%以上の指導対象が医師等の治療を受けていると回答している者が半数を越えてい

た。
この指導者に対する質問と回答は、スポーツマンに対するアンケート・質問3とその回答に対応するものである。従って、両者から同じ様な回答状況が得られるのが望ましいのであろうが、スポーツマンからは、90%以上(図3)につき医師等の治療を受けたとの回答を得、指導者からは、治療を受けた者30%以下と回答した者が大多数であった。この両者のくいちがいは、調査対象が100%マッチングしていないこともあろうし、また調査対象本人についての回答(スポーツマン)と第3者についての回答(指導者)とで、基本的な点で相違はあるが、指導者の指導対象に対する健康管理面についての意識の低くさも考えられ、注目しなければならぬ調査結果であろう。

表8 指導者からみた指導対象が治療を受けた割合

	競技力向上 コーチ	スポーツ 指導員	少年団 員	ク ラ ブ 指 導 者	指 導 者 計
治療を受けたのは					
10%以下	64 (38.8)	62 (80.5)	73 (88.0)	41 (70.7)	240 (62.7)
11~20%	42 (25.5)	9 (11.7)	5 (6.0)	6 (10.3)	62 (16.2)
21~30%	22 (13.3)		3 (3.6)	3 (5.2)	28 (7.3)
31~40%	9 (5.5)			1 (1.7)	10 (2.6)
41~50%	5 (3.0)				5 (1.3)
51%以上	19 (11.5)			5 (8.6)	24 (6.2)
無 記 不 明	4 (2.4)	6 (7.8)	2 (2.4)	2 (3.4)	14 (3.7)
合 計	165 (100)	77 (100)	83 (100)	58 (100)	383 (100)

3) あなたが指導する競技部(クラブ)は、部員(クラブ員)の健康管理や医療のために、特定の病院をもって(指定して)おりますか? ……の回答状況

本質問に対する回答状況は、図6に示す通りであった。すなわち、スポーツ指導者全体としては、「いいえ」=指定病院を持っていないと回答した者が多く63.4%、「はい」=持っていると回答した者が36.0%、無記不明0.6%であった。

指導者区別に見ると、指定病院等を持っていると回答したのは、競技力向上コーチ、スポーツクラブ指導者、スポーツ少年団の指導員、スポーツ指導員の順に多く、それぞれ52.7%、43.5%、26.5%、11.7%であった。なお、プロスポーツ指導者については、4名の回答しか得られていないが、100%指定病院を有していると回答していた。競技レベルが高いほど、またスポーツを行なう団体・組織が確立してくるに従って、指定病院等を持つ傾向にあるように思える。

4) 特定の病院等をもっている(指定している)場合、その病院等を決めた理由は次のど

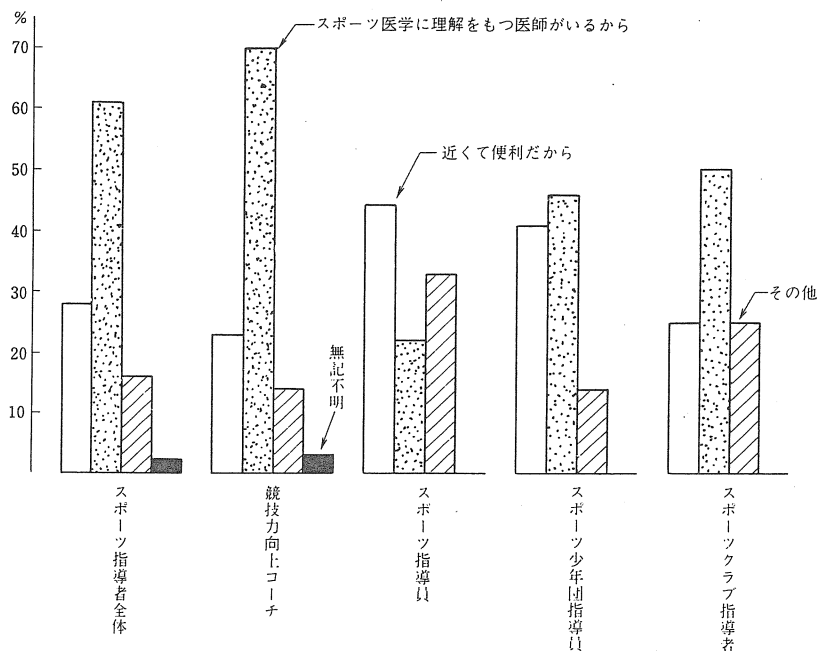


図7 指定病院を選択した理由。

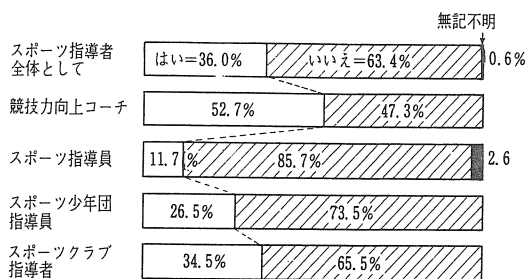


図6 指導対象の健康管理や医療のための指定病院等を持っていますか? の回答状況。はい=持っている、いいえ=持っていない。

すか? ……の回答状況

前の質問で、特定の病院等を持っていると回答した者についての質問で、特定の病院等を持った理由を、「近くて便利だから」、「スポーツ医学に理解をもつ医師がいるから」、「その他」の3区分で回答を引き出している。

回答状況は、図7に示す通りである。スポーツ指導者全体としての回答状況は、「スポーツ医学に理解をもつ医師がいるから」に回答した指導者が多く約60%、ついで「近くて便利だから」が約30%であ

た。しかし、指導者区別に見ると若干様相はことなり、競技力向上コーチ以外では、「スポーツ医学に理解……」が低下し、「近くて便利だから」の回答者が多かった。スポーツドクターが誕生していないスポーツ医学後進国のわが国ではあるが、ある意味では、次第にわが国においても、スポーツ医学が普及し、スポーツ医学に取り組む医師が増加してきたことを、この資料は物語っているものと思える。

5) 特定の病院等をもっている (指定している)

場合、次のどれですか?……の回答状況

病院等の種類を、1・病院、2・医院、診療所、3・接骨院、4・はり、灸、マッサージ、5・その他の5種類で問うているが、回答状況は、図8に示す通りであった。スポーツ指導者全体としての回答状況は、病院と回答した指導者が最も多く約55%、ついで医院、診療所の32%、はり・灸・マッサージの24%、接骨院の18%、その他4.5%の順であった。ただし、指導者区分別に見ると、それぞれ特徴がある。競技力向上コーチにおいては、はり・灸・マッサージと回答した指導者が多く38%あり、この回答は、他の指導者については見られなかった。スポーツ指導員については、医院・診療所と回答した者が

多く、スポーツ少年団の指導員とスポーツクラブの指導者については、接骨院と回答した者が多い特徴が見られた。この質問は、スポーツマンを対象とするアンケート項目の4 (表1) とほぼ同じで、同様の回答を指導者側から引出していることになるが、図8に示す指導者側の回答と表5に示すスポーツマンの回答とは、よく類似していた。

6) あなたが指導する競技部(クラブ)では、部員(クラブ員)に定期健康診断を行っておりますか?……の回答状況は

回答は、「年1回以上行なっている」、「行なっていない」の2種で得たが、結果は、図9に示す通りであった。すなわち、スポーツ指導者全体としては、

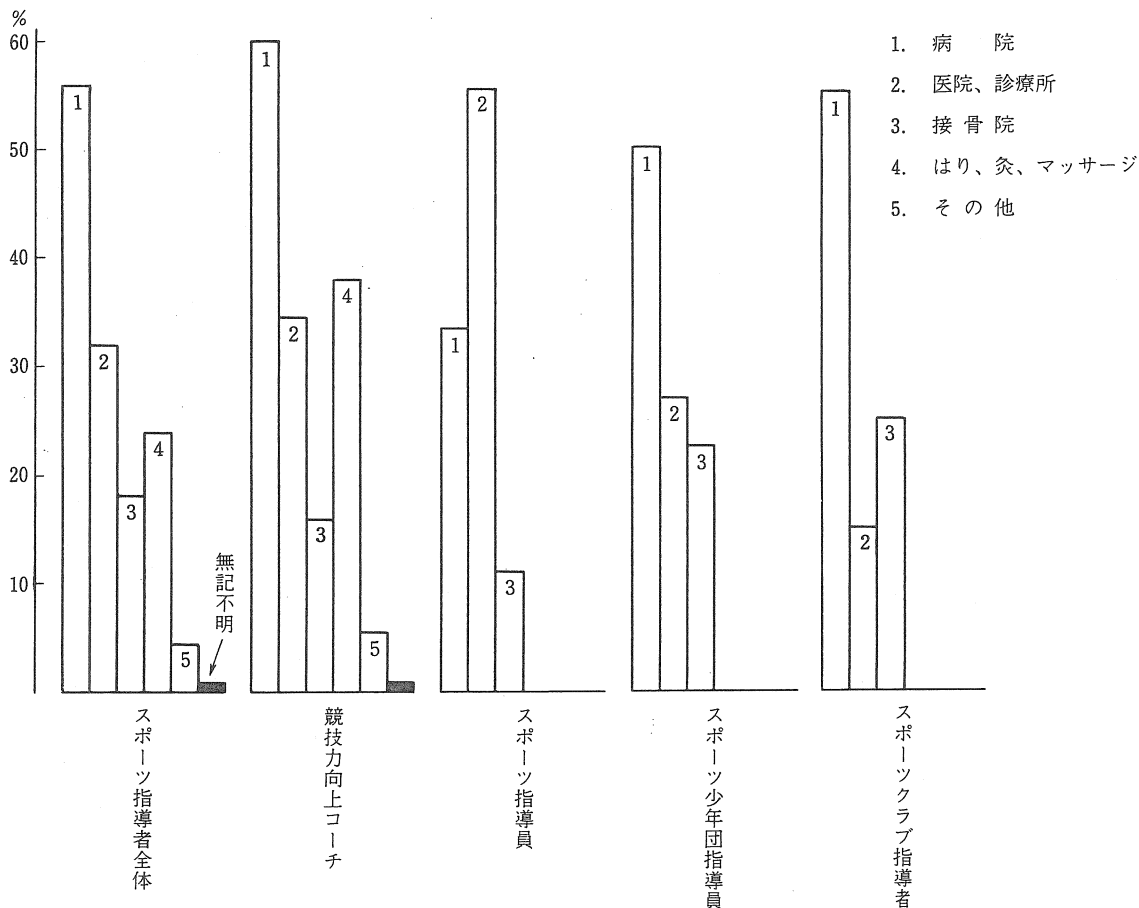


図8 指定している病院等の種類。

36.8%が年1回以上行なっていると回答した。しかし、指導者区分別に見ると、競技力向上コーチは60%が行なっていると回答しているのに比して、特にスポーツ指導員とスポーツ少年団指導員については、行なっていると回答した者の割合は低く、約10%であった。

この質問項目は、表1に示す通り同様の内容をスポーツマンについても問うている。スポーツマンの回答状況は、図4に示すように約70%が健康診断を受けていると回答し、指導者側から得た回答状況との間に、少なからずへだたりがある。推測するに、指導者は、指導対象グループ（チームや団体）として健康診断を実施しているか否かを回答しているのに比し、スポーツマンの方は、スポーツを行なうグループに関係なく、健康診断を実施したか否かを回答していることによる相違ではないかと思われる。

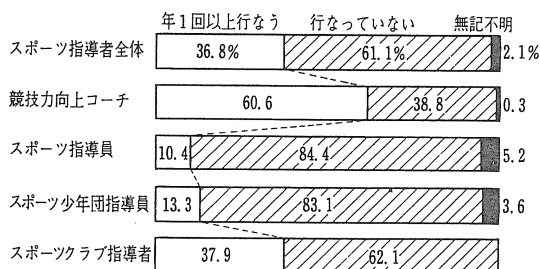


図9 指導対象は定期健康診断を行なっているかの回答状況。

7) あなたはスポーツ医学を専門とする病院が必要だと思いますか？……の回答状況

本質問について、「絶対必要」、「必要」、「あった方がよい」、「どちらともいえない」、「必要ない」の5種類で回答を得た。回答状況は、図10に示す通りである。スポーツ指導者全体としての回答状況は、絶対必要と回答した者47.3%、必要と回答した者26.6%、あった方がよいと回答した者21.7%、必要ないと回答した者は、わずかに1.3%であった。指導者区分別に回答状況を見ると、絶対必要と強く必要性を訴えた者は、競技力向上コーチが最も多く70.9%、ついでスポーツクラブの指導者で36.2%、次にスポーツ少年団の指導者で28.9%、スポーツ指導員が最も低く24.7%であった。

この質問は、全く同様のかたちでスポーツマンに問うているので、両者の回答状況を比較してみると、スポーツマンが絶対必要と回答している者が44.8%（図5）であるのに対して、指導者の方は47.3%と若干指導者側の方が強く必要性を感じているようである。

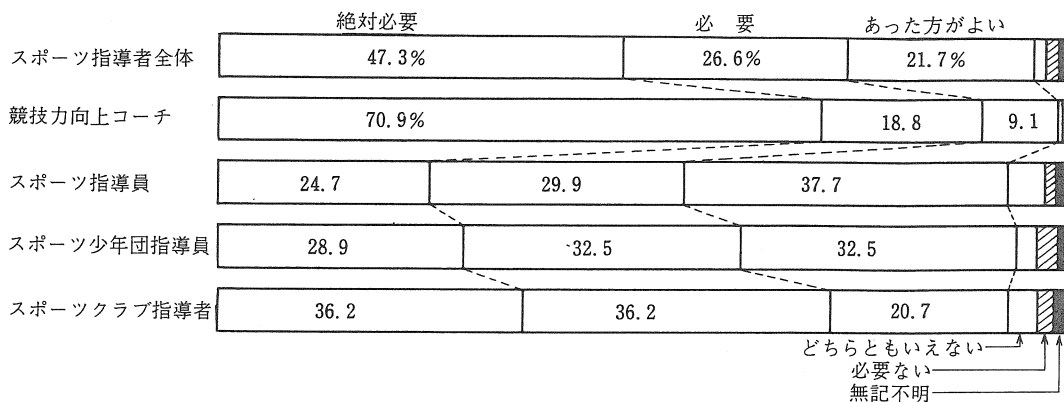


図10 スポーツ医学を専門とする病院を必要とするか？ 指導者の回答状況。

5. スポーツ医学を専門とする病院についての意見、希望など

表1及び表2-bに示す通り、本調査は、スポーツマン及び指導者を対象に、「スポーツ医学を専門とする病院が必要である理由、そのご意見・ご希望をご記入下さい」と自由記述させているが、この自由記述欄に記入されていた主なものを列記すると、以下の通りであった。

1) トップ・アスリートの意見

- a. スポーツ病院があれば、故障しても安心して治療、リハビリテーションが受けられる。
- b. スポーツ専門病院でなければ、スポーツやスポーツ障害について理解がなく、一般病院では信頼がうすい。
- c. 競技者の場合、一般の人と異なり、外傷時に長期完全休養はできない。運動を続けながら治療したり、正しいリハビリテーションを受けられる専門の医療機関が絶対が必要。
- d. スポーツ医・科学が発展しなければ、世界の中で勝ち残れず、競技力の向上はストップしてしまう。欧米を調査して日本でも対策を考えるべきである。
- e. 各競技別に、しかも各地区に信頼できる医療機関が必要。
- f. 競技レベルが向上していくうち、スポーツ障害も増え、程度も重いものが増えている。専門的スポーツ医療機関ができれば、治療だけでなく、傷害・疾病予防について研究し、安全に競技できるよう対策を考えてもらいたい。

2) スポーツ愛好者の意見

- a. 近来、スポーツは国民全体のものとなっており、健康のため正しくスポーツを行なうには健康管理が最も重要で、専門病院の早期実現が望まれる。
- b. スポーツにおける外傷は特有のもので、一般の医療機関では誤診したり、正しい治療を時機に応じて行なえないことが多い。そのため運動を休止したり、断念させられることがある。
- c. スポーツを健康増進の目的で行おうとしても、時に誤った外傷や障害をひきおこす原因ともなりかねない。正しく運動が行えるためにスポーツ医

学の役割は大きい。

- d. スポーツを行なうにあたっての相談や健康診断など一般の医療機関ではできない。
 - e. スポーツ障害について対策を考える時、専門的医療機関は必須で、そこから治療、リハビリテーション、予防などのための研究がなされ、安全でかつ正しい運動を指導していく基礎が生まれる。
- ### 3) 強化コーチ、ジュニア強化コーチ及びプロスポーツ指導者の意見
- a. スポーツ医学専門病院では、一般の医療機関と異なり、スポーツ医学として専門の治療・リハビリテーションを受けられ、トレーニングについても指導を受けられ、安心して利用できる。
 - b. 一般の医療機関と異なり『競技復帰』を目的とした対処を受けられ、可能な限り運動を継続させながら治療したりして、選手の体力の低下をきたさない。
 - c. 世界の中で日本がスポーツの一流国として勝ち残っていくためには総力を結集しなければならない。欧米各国に比べスポーツ医・科学の分野は遅れており、早急に対処しなければならない課題である。
 - d. スポーツ障害や疾患について統計や原因分析を行なうことにより、優れた治療やリハビリテーションの研究、疾病・外傷の予防の研究ができる。またそれは競技力向上のための研究にも結びつく。
 - e. スポーツ指導をしていく中で健康管理は重要な問題で、定期的な専門的健康診断、障害予防の指導はもとより、ドーピングなどについて指導者が研修できるような専門機関は絶対必要。
 - f. 健康管理は現場に密着していなければならない。地方にも指定医療機関にスポーツ専門医師を配備したり、現場で働けるスポーツドクター、トレーナー等の養成も必要である。
- ### 4) スポーツ指導員、スポーツ少年団指導員及びスポーツクラブ指導者の意見
- a. スポーツを指導していく中で安全に行なうことは重要なことで、健康管理が充分になされなければならない。突発的な事故やスポーツ障害を起こ

した時、安心してまかせられる専門的医療機関の実現を望む。

- b. 健康管理について相談したり、研修ができるような専門的な医療機関は必要。
- c. 一般の医療機関はスポーツやスポーツ外傷に対して無知であり、運動を休ませることしか考えない。競技力復帰を考えた時、体力の低下や意欲の低下は、選手の可能性を狭ばめてしまう。是非スポーツ選手指導者に理解のある医療機関を与えて欲しい。
- d. スポーツと健康についての研究が遅れており、現場では経験的な指導しかできない。医・科学的に充分研究し、啓蒙できるような総合的なスポーツ医学の専門機関を設けて欲しい。

6. まとめ

1) スポーツマン(スポーツを行なう人の意)1210名、スポーツの指導者789名を対象に、スポーツ活動による疾病、外傷の発生状況等に関するアンケート調査を行なった。

2) アンケートの配布と回収の方法は、郵送と使送の併用であるが、スポーツマンについては66.0%(811名)、指導者については49.0%(387名)のアンケート回収率であった。

3) この1年間に、スポーツ活動によって病気にかかったり、外傷を受けたことがありますか?との質問につき、スポーツマンの62.6%が「かかった」と回答した。スポーツマンをトップ・アスリートとその他(スポーツ愛好者)とに区分して回答状況を観察すると、トップ・アスリート73.1%、スポーツ愛好者40.9%で、トップ・アスリートの高率が注目された。

4) 上記の「かかった」と回答した者の90%以上が医師等の治療を受けたと回答し、その医療機関としては、整形外科・外科が最も多く58.9%、ついではり・灸・マッサージの32.7%、接骨院25.6%、内科7.5%、その他4.3%の順であった。但し、トップ・アスリートとスポーツ愛好者とに区分して回答状況を観察すると、トップ・アスリートにはり・灸・マッサージが多い(35.0%)特徴が見られ、わが国スポーツ界も、早急にスポーツドクターならびにトレーナー制度を確立する必要性が感じられた。

5) スポーツ医学を専門とする病院が必要であるか否かの間につき、スポーツマンの約半数(44.8%)が絶対必要と回答し、必要ないと回答は、わずかに1.4%であった。特に、絶対に必要であるとの強い訴えはトップ・アスリートにおいて高く、51.0%であった。

6) 指導対象の健康管理、医療のために特定(指定)の病院をもっているか?の質問に対し、指導者の36%がもっていると回答した。指導者の中でも、トップ・アスリートの指導者である競技力向上コーチは、高率(52.7%)でもっていると回答した。

7) 特定の病院をもっていると回答した指導者を対象に、その理由を問うと、「スポーツ医学に理解をもつ医師がいるから」との理由が最も多かった。わが国スポーツ界の指導者間にも、次第にスポーツ医学が普及されると同時に、スポーツ医学に感心を持つ医師が多くなって来たことが予想された。

8) スポーツマンについてと同様、指導者についてもスポーツ医学を専門とする病院の必要性を問うと、スポーツマン(スポーツを行なう人)以上にその必要性を訴え、特に、競技力向上コーチの70%以上が「絶対必要」と回答しているのが注目された。

